

念仏往生の教説と信因称報の教説と

親鸞聖人の念仏往生の教説

弥陀の本願と申すは、名号をとんへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり(Ref「親鸞聖人御消息」註 P785)

覚如上人の信因称報の教説

「下至一念」は本願をたもつ往生決定の時剋なり、「上尽一形」は往生即得のうへの仏恩報謝のつとめなり(Ref「口伝鈔」註 P910)

一、親鸞聖人の薫陶を受けた土壌は念仏往生のみ教えに立つ

去る九月二十七日、「門信徒会運動研修協議会」のご縁により、お念仏の薫り高い土壌をお尋ねしたことであります。

当日は研修の第一部で浄土真宗のみ教えにお尋ねして参りました。お話の途上、お同行の皆さまとご一緒にお念仏を両三度お称えさせて戴いたことであります。

称え終ってお一人のお同行にお尋ねする機会がございました。

「ただ今、皆様とご一緒に南無阿弥陀仏とお称え申しました。すると、聞こえて下さったものがあるはずです。何とお聞きとどめになったでしょうか」これに対して、間髪をいれずそのお同行は、

「如来様のお喚び声が聞こえて下さいました」とお応えになりました。

さすがに、親鸞聖人当時の瓜生津門徒の土徳のなせるわざではなかったかと力強く受け止めさせて戴いたことであります。

ご承知の通り「如来様のお喚び声(本願招喚の勅命)」とは、南無阿弥陀仏の六字釈に示されたお心であり、阿弥陀如来が私に対して「ワレニ

マカセヨ、ワレヲタノミニセヨ」と呼び詰めに呼んでいて下さる(これを古語で「ヨバフ」と申します)お喚び声であります。「わが国浄土に生まれておいで」と呼び続けて下さる阿弥陀如来のお喚び声であります。

まさしく南無阿弥陀仏と称えれば聞こえて下さった「南無阿弥陀仏」は、「本願招喚の勅命」であるとお応え下さったのであります。

これは、親鸞聖人が教行信証において明らかにされた「行信不離」の念仏往生のみ教えを頂戴して下さっているお同行の姿であります。

私たちの浄土真宗はこうしたお同行によって連綿として支えられてきたのだということを決して忘れてはなりません。

二、浄土真宗には、念仏往生の教説と信因称報の教説とが併存する

「行信不離」の念仏往生のみ教えというのは、「弥陀の本願と申すは、南無阿弥陀仏の名号を称えんものをば極楽へ迎えんとお誓い下さっているのをふかく信ずるといふみ教えであり、御消息(ご讃題)に典型的に示されている通りであります。

お念仏は第十八願文によってお誓い下さっているのですから、仰せのままにお念仏するのが阿弥陀如来のお救いに与る姿だと頂戴するのが信心だからです。

このことはよりポピュラーには、歎異抄にも第二条に「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(註 P832)に示されている通りであります。

しかしながら、歎異抄第十四条には「一念発起するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚の位いにをさめしめたまひて、…(中略)…一生のあひだ申すところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり(註 P845)」という御文も見受けられます。

このことから浄土真宗には、念仏往生の教説と信因称報の教説とが併存して来たということは動かすことのできない事実だと思われま

す。いわば、信心獲得する上でのロジックは、「念仏往生」の教説によって支えられ、信心獲得してのちの念仏者の日常生活を支えるロジックの一面が「信因称報」の教説だと受け止められることであります。

その意味では、念仏往生の教説と信因称報の教説とは互いに矛盾するものではないといわれるのであります。

三、覚如上人の信因称報説の意義と限界

しかしながら、本願寺第三代の覚如上人に至って「信因称報」の教説は大きな変貌を遂げたと思受けられます。では、覚如上人の信因称報説にはどのような意義があって、またどのような限界があるのでしょうか。

覚如上人の信因称報の教説の特徴は、信心と称名が私共の上生起する場合には、時間的前後があり、信心が先で称名念仏が後だと思覧になることであります(Ref「ご讃題」)。

ご本願(お名号)のおいわれを疑いなく頂戴することができたとき(これを「信心を頂戴する」と申します)、私たちは撰めとって決して捨てないとする撰取不捨の利益に与り、往生成仏すべき身に定まります。

この信心に催されてする行いが「称名」だととらえるのであります。

これは、南無阿弥陀仏の名号を疑いなく聞き受けている衆生(機)の側から本願の信と行との分齊を定められ浄土真宗の特徴を鮮明にされたものだといわれるのであります(Ref「季刊せいてん」No70『口伝鈔』)。

すなわち、「信心」は、念仏申さんと思立つ心の起る初一念において頂戴するものであり、「念仏」は、信心獲得後の念仏生活の上での報恩感謝の生きざまを明らかにされたものだと思受け止めることができます。

これによって念仏が自力の念仏に陥る危険性は排除されたことにな

るのでしょう。これが信因称報のプラスの側面です。

一方、信心が先で念仏が後なのだから、お念仏は信心獲得に關与しないとする見方を維持されます。これが信因称報説の負の側面です。

称えるまんまが如来様がこの私を呼んでいて下さるお喚び声を聞かせて戴くことであるとする「称即名」のダイナミックな信心獲得のプロセスを覚如上人以来の「信因称報」説の立場から排除なさってきた点は、ご常教の決定的に負の側面であると思見ないわけには参りません。

なる程、お同行がご法座毎にお寺に参集し「聞法」する伝統が生活の柱になっている場合には、お聴聞を通して、ご本願(お名号)のおいわれをお聞かせに与り、お育てに与るのですから教説の違いはそれほど大きな問題ではないのかもしれない。

けれども、そうした習慣づけのないところ、若しくは海外開教や都市開教に際しては、その最初の信心獲得が危ういものとなりかねません。

また、信心が先で念仏が後なのですから、信心をしかと頂戴できなければ念仏のお声が聞こえなくなる道理であります。

「昨今はお念仏の声が淋しくなった」とされる背景にはご常教が責任を持って戴かなくてはならない斯る課題が潜んでいることであります。

また、日本人会が消失した後の海外での浄土真宗の展開に最前線の寺院が呻吟している現状には「信心正因 称名報恩(信因称報)」のご常教が担ってきた決定的に負の側面を見直すことこそ宗門にとっての喫緊の課題であると思なくてはならないのではないのでしょうか。合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 リビンぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒520-0501 大津市北小松四五番地 電&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥	
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp	